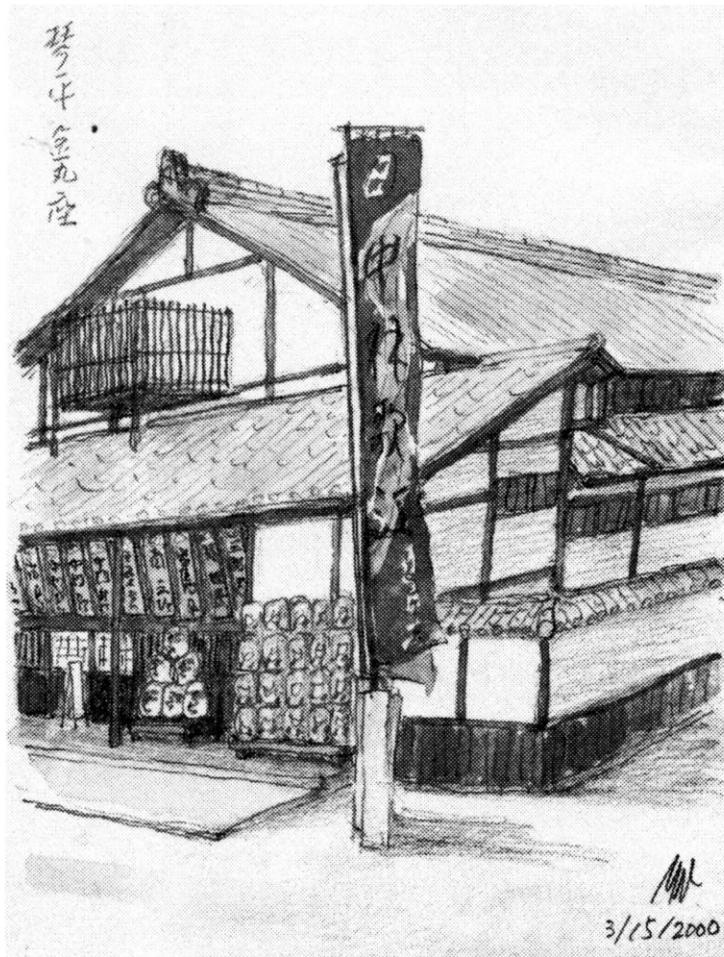




『琴平金丸座』



永原 誠 画

「反戦は正しかったのか」
という問いの哀しさ

一五〇号記念原稿を
お寄せ下さい

編集委員会

燎原文芸

黒住嘉輝

一三人の無期停学処分(下)
私の記憶

須田 稔

総会記念講演要旨(上)
マス・メディアにより
つくられた世界像
—北朝鮮・イラクの危機そして
バクス・アメリカーナ危機について—

田北亮介

編集後記

「反戦は正しかったのか」という問いの哀しさ

須田 稔

超大国アメリカの強大無比の軍事力による「衝撃と恐怖」という名の冷酷無比の爆撃で弱小疲弊国イラクの独裁体制は脆くも崩壊完全武装の占領軍兵士に笑顔で対する市民たちだから反戦は間違っていたと書く日本の新聞記者

笑顔は 恐怖政治から解放されたと思う喜びかもあるいは「衝撃と恐怖」の暴挙が終わっての安堵かもあるいは強者への恭順だけが護身の術と知る自嘲あるいは 力こそ正義なりと妄信する者への蔑みあるいは 異教の徒もまた人間であるかと探る好奇心

五六年前 敗戦国の市民だったわたしたちの 占領軍を目前にしたときの心情を思い出さないか

「ちちをかえせ ははをかえせ こどもをかえせ」としよりをかえせ わたしをかえせ わたしにつながるにんげんをかえせ くずれぬへいわを へいわをかえせ」 ヒロシマとナガサキの この恸哭が聞こえてこないか

一九四五年八月の広島と長崎は一九三七年の ゲルニカと同じジエノサイド

ナチスとファシストの蛮行を糾弾し

ゲルニカ市民の死を悼んでも

軍国主義の終焉を早めたのだから

ヒロシマ・ナガサキの被爆者は感謝せよと? フセイン独裁と抑圧を終わらせたのだから

イラク市民はブッシュを鎮めべきだと?

即死二〇万人余 五七年経てなお被爆者手帳持つ三〇万人は

謝罪せぬトルーマンを決して赦しはしない

死者たちを記憶しないことは 歴史を忘却すること 二度の世界大戦の惨禍の末の国際連合憲章を忘れたか 「自衛権の行使は武力攻撃を受けた時」のみなのだ だからこそブッシュは 安保理決議を得ようと奔走し 失敗するや 先制攻撃に走ったのではなかつたか

一九〇七年一〇月 ハーベで署名の「国際紛争平和的処理条約」 一九二九年七月発行の「戦争放棄ニ関スル条約」

「国際紛争解決ノ為戦争ニ訴フルコトヲ非トシ

且其ノ相互關係ニ於テ国家ノ政策ノ手段トシテノ戦争ヲ

放棄スルコトヲ其ノ各自ノ人民ノ名ニ於テ嚴肅ニ宣言ス」

一九四六年一一月四日発効の「国際連合教育科学文化機関憲章」

一九四六年一一月三日公布の「日本国憲法」の前文と第九条と第一〇条

「國權の發動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、

国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」

一九四八年一二月一〇日採択の「人権に関する世界宣言」を

忘れていいないか

ブッシュの脅迫に抗して この戦争に不同意を示した一三〇以上の国
国連加盟国一九一のうち約七割を占め

「開戦」前の一二月九日 フィレンツェで一〇〇万人

今年一月一八日から三月一五日まで ワシントン ニューヨーク

ロンドン ミラノなどで四三〇万人 三月二〇日後三六〇万人が反戦デモ

ヨーロッパの外交・安全保障で今後は対アメリカでどうあるべきか

「より自主的であるべきだ」と「アメリカ寄りを続けるべきだ」の比率は
 英 45% : 51% 仏 76% : 23% 独 57% : 42%
 伊 61% : 37% 西 62% : 28% 土 62% : 16%
 イスラム諸国で「アメリカは全く好ましくない」の〇二年夏と〇三年五月
 ヨルダン 57%が 83%へ パキスタン 58%が 71%へ
 トルコ 42%が 68%へ レバノン 38%が 48%へ
 インドネシア 9%が 48%へ (※)

属国にはならぬ国をうとましく思うブッシュの覇権主義
 「ならず者国家」と見れば先制攻撃をしかけるブッシュの戦争主義
 殺戮と破壊の惨禍を繰り返したあげくの国際ルールを乱暴に破る無法
 パクス・アメリカーナとアメリカン・デモクラシーへの妄信
 その非道の暴力で生命を奪われた人びとを無視する酷薄

「反戦は間違っていたのではないか」と問う新聞記者よ
 光を見て影を見るのは 影を見て光を見ないと同じ誤りではないか
 人間がつくりだす出来事の真偽や是非や善悪を判断する時の尺度は
 まず第一に生命の尊厳に敬意がはらわれているかどうかではないか
 笑顔だけ見て悲嘆と慟哭に耳をそばだてなかつたのは誤りではないか
 戦争反対 「先制攻撃戦略」反対こそ 人間の感性と叡智
 そこにこそ 地球人類社会が持続できるという希望がある

(二〇〇三・六・八)

(※) 六月五日付『しんぶん赤旗』一面に、オルブ赖ト前国務長官が座長のプロジェクトがビュリー・リサーチ・センターの委託で、五月に約二〇ヶ国一万六千人を対象にした世論調査が六月三日公表された、とする記事があり、表がある。

(注) 二〇〇三・五・二八付『毎日』の「記者の目」に論説委員の高畠昭男記者は、「市民の笑顔が語る『自由』—反戦は正しかったのか」を書いた。「反戦の人びとの、理想や善意を疑いはしないが……島国平和主義や傍観主義を捨てて、もう大入り袋のようなものを渡していく

少し感性を研ぎ澄ませる必要があるのでは……」と考える彼の知性と感性を大新聞の論説委員であるゆえに余計におぞましく感じずにはおれなかつた。思案するうち、六月四日に同じ「記者の目」にカイロ支局の小倉孝保記者が「イラク市民の笑顔の裏側……強者に手振るは自衛の術……米に抜きがたい不信感」を見出しに一文を書いた。わたしは『毎日』のフェアプレイ精神の健在に安堵したが、それでも、ブッシュ政権の戦略の非人道性を糾弾しないではおれない。

(すだみのる 立命館大学名誉教授)

一三人の無期停学処分(下)

—私の記憶—

平井 初美

八、貧しくても心に誇りを失わなかつた家族の励まし

私は一九二九年、堺市で生まれました。父は祖父から阪堺電車の御陵前駅の近くの八花館という小屋をうけつぎ、興行師の仕事をしていました。五才頃の記憶ですがその頃、何となく沈みこんだ様な町の中で、漫才や浪花節などがかかると満員になりました。客席の一番後に三方を囲んだ一段高いボックスがあり、時々警官がそこに立つて見張りに来ていました。下足番やお茶子さんが「また来てまつせ」と父とそこそこ言い合つて

ました。舞台で世の中の不満や下ねたなどを言うと大声で「弁士中止」と叫ぶのです。こども心中に「この人はいやな人」と思つていました。気のよい父は、宵越し金は持たぬ芸人たちの借金の尻ぬぐいをして、とうとう小屋は人手に渡つてしましました。その後父はいろんな仕事に手をつけましたがうまくゆかず、私は小学校を五回も転校しました。卒業後府立堺高等女学校に入学し、四年修了後、府立医大の女専に入学したのです。私の家庭は父母と妹、弟の五人暮らしでした。戦後の不況の中、父は失業中で家計は売り食い生活でした。母の着物は既に食料に変

わっていたし、父の書籍が毎日毎日消えて、かほぢやに化けていきました。生活に最低必要な物以外すべて無くなり、売り食いも底をついて、小学生の時からいつも優等生だった妹は、進学を諦めて近くの工場に働きにいきました。私は「何とかならないのか」と何度も父に頼みましたが、「どうにもならん、仕方が無い」と言うだけで、私は父の無気力が許せないと思いました。私が働かないで、いつまで学校に行けるだろうか、夏休みや冬休みのアルバイトはしても報酬は少ないし、後一年余り、どうしても卒業したい、そして収入を得たいと思いました。体が弱く今まで働きに出た事の無い母が「私が日雇いしてあんたを卒業させてあげる」と言つてほんとにしばらくの間、働きに行つたのです。貧しさに打ちのめされそになると、私は真理を追究する医師を目指す学生なのだと、自ら誇りを取り戻していました。

九、初めての証言と勝訴の歓び

三月二十四日 放学学生の裁判があり、京大の木村教授（放学処分を受けた本科学生の父）の意見陳述がありました。教授会の記名投票の是非について、「大学の漆葉

事務局長が、教授ともあろうものが記名投票でも堂々として意見を述べられる筈だとおっしゃるが、すべての人に当てはまるものではないし、またこれを利用するものもあるから。」と述べられました。

この裁判の前後だったと思いますが、私にも証言を求められました。それは上田好治さんが教授会に居なかつた事を証言するものでした。流会の後、帰りの階段を上がつてきた彼はカーキ色の将校マントを着て、白いマフラーの様な物を首に巻いていて、言葉を交わした事を証言しました。この学生処分事件の最中は各新聞社の記者が、毎日のように教室に入つてき、机の上に腰掛けて無作法な態度で取材に来ました。クラスの皆が拒否して「机の上に座らないで」と抗議しました。何回かの裁判の後、いよいよ判決の日、七月二〇日、学校に着くと、保田さんが私を見つけて「勝った」といいました。すぐには信じられなかつたけれど、掲示板には

事務局長が、教授ともあろうものが記名投票でも堂々として意見を述べられる筈だとおっしゃるが、すべての人に当てはまるものではないし、またこれを利用するものもあるから。」と述べられました。

この裁判の前後だったと思いますが、私にも証言を求められました。それは上田好治さんが教授会に居なかつた事を証言するものでした。流会の後、帰りの階段を上がり、木村さんは「意外だ、学生も学校の方もびっくりしている」と言いながら溢れる喜びで息を弾ませています。「良かったですね。八ヶ月も頑張った甲斐があつたわ」と野田さんと二人で何回言つたでしょうか。そして裁判長に対する感謝の気持ちが沸き起こつてきました。国内外の情勢が赤狩りに駆り立てられている中、正しいものが認められた事、良心的な裁判長が居ることが二重の喜びでした。

一〇、不条理な大学当局の反撃と恐喝

八月二九日、新聞部の部室になつてゐる小屋に、物々しい錠前がかけられていて、学長名での部屋を使用してはならぬと通告が貼つてありました。学校は此処が復学運動の拠点になる事を恐れています。裁判で処分取り消しの判決が出たのだから、学校側が控訴したとしても、学生が教室

事実認定無シ

二、平井以下四名ニ対シテハ
裁量権ノ逸脱デアリ違法デアル
詳細ハ追ツテ発表

に入るのは当然だと思うのですが、これを力強く抑えようとする数人の守衛と、学生との間で毎日のように小競り合いがありました。一階の門の横にある私達の教室に嬉しさに野田さんと抱き合つて喜びました。よかつた、よかつた、ただそれだけが頭の中を一杯にしました。木村さんは「意外だ、学生も学校の方もびっくりしている」と言いながら溢れる喜びで息を弾ませています。「良かつたですね。八ヶ月も頑張った甲斐があつたわ」と野田さんと二人で何回言つたでしょうか。そして裁判長に対する感謝の気持ちが沸き起こつてきました。国内外の情勢が赤狩りに駆り立てられている中、正しいものが認められた事、良心的な裁判長が居ることが二重の喜びでした。

うか。二学期からは私達のクラスは伏見の分院で授業と実習をする事になり、その後の本学での様子を詳しく知る事は出来なくなりましたが、分院でも志多教授は、授業の休み時間に教室に来て「分院での事を本科の学生に話をしないように、もしそういう事が分かれれば退学してもらう」と脅して帰られました。杉本さんはなぜか共産党員だと誤解され、卒業試験で志多教授の産婦人科学だけ何回も不合格になり、クラスの数人で問題と答えを合わせて、合格点を取つてある事を確認して、志多教授に合格したと言う、信じられない出来事がありました。私はあまりにも納得出来ない不条理な世の中の事について知りたい、もっと勉強しなければと思って、いろいろな本

を手当たり次第に読みました。

一一、人生の疑問にこたえてくれた「共産党宣言」

その中でマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」を読んで、もやもやした頭の霧が晴れるような気がしました。資本主義社会の仕組みがどうなっているのか、富の不公平はなぜ起きるのか、戦争は誰がはじめるのか、等まるで数学を解くように解明していました。私は収入の少ない父を非難するのは

一五〇号記念原稿をお寄せ下さい

編集委員会

来年一月一五日発行予定の本誌は一五〇号になります。創刊号が発行されたのは一九八〇年ですから、二四年の時間が過ぎました。

当初のよびかけ人の多くがすでに故人です。この間に隔月間を確立し、多くの方の支持と熱意によつて今までつづいてきましたが、「京都の民主運動史を語る会」の性格上、会員の多くが高齢化し、若い人の参加があまり期待できません。しかし昨今の世界と日本の情勢、自衛隊のイラク派遣や底の知れない大不況等を見るにつけても、ここで国民の間から民主主義の大運動が展開される必要を痛感せずにおりませんし、かつての運動の経験をかえりみる必要はさらに切実となってきたように思えます。

この機会に、多忙あるいは高齢等の事情でふだんは寄稿できなかつた方がいたから、短文の原稿を頂き、一五〇号を記念したいと思します。回想・時論・近況報告等、テーマは問いません。四〇〇字五枚程度を目安にしています。締切は一月三〇日とさせて頂きます。会員諸氏がふるつて御応募下さるようお願いします。

間違つている事に気が付きました。

しばらくして私は共産党に入りました。

卒業間近かのある日、思いもかけず放学生の平井正也から求婚されました。彼は学生運動の先頭にいて、本科の学生や女専の学生からも信頼されていました。彼の哲学や思想に関する読書の多さや筋のとおった話にはいつも尊敬していましたが、まさか女性に関心があるとは思つてもいなかつたのです。長女である私は今まで人に

たよつたり、甘えたりしたことはありませんでした。この人なら私は頼れる。大きな胸に入れる。この先、どんな人生を歩くことになるかわからないけれど、私を守つてくれると思いました。

一二、無期停学で得た人生の豊かな財産

卒業後大阪鉄道病院でインターンの間、淡路平和診療所でアルバイトをしながら山本漸先生に診療所の仕事をついて教えて頂きました。国家試験が終わつて間もなく、平井正也と結婚しました。両家の身内だけのささやかな結婚式に仲人をして下さつたのは足立先生と竹沢先生でした。彼との結婚生活

激動の時代の学生生活はつらい事や悩みも多かつたけれど、得がない思い出、忘れられない思い出で一杯です。
(ひらい はつみ 大阪市在住
医師 京都府立医大付属女専卒)



マス・メディアによりつくられた世界像

—北朝鮮・イラクの危機そしてパクス・アメリカーナ危機について—

田北亮介

一、報告書の問題意義

イバースーパーパワー＝アメリカが唯一絶対的な体制をつくり、それに刃向かう権力が欠如した世界と描き、一極覇権体制を固定的に受容していたからです。昨今のア

は八年間の復学運動を軸にして波乱の多い生活でした。医師として

初めて勤務したのは、八尾市の西郡平和診療所でした。大変貧しい、

当時被差別部落といわれた村でしたがそこで四年余りは、その後の人生にとつて、又医師の出発点として貴重な経験を得た年月でした。

メリカの振舞いは、一国行動主義（ユニラテラリズム）そのものですが、その面にのみ目を奪われる」と、それを客観的な現実と錯覚し、動かしたい体制とか構造とみなしてしまいます。その結果、世界秩序の現状維持をアメリカにのみ委ね、公正な世界秩序とアメリカの秩序が混同され、現状の異議申し立てのすべてがあたかも秩序破壊者であるかのような烙印をおされることになるわけを、わたしは「対米自立派」にたいする「依米派」と定義しているのである。「依米派」と定義しているのであるが、その文脈から、「無法者国家」とか「ならず者国家」という言葉が、真実味をもつて受容されいくわけです。バーチャルなものが現実存在とみなされるわけです。そして、現状維持の唯一の委託者アメリカに、節度ある行動を求めるのみに堕することになるのです。日本外交の主流が、日々の行動で立証しているといえます。

さらにもう一つ、上記『朝日』コラムに触れておきます。コラムニストは、世界が多元主義的な秩序と体制をつくりえていないことを嘆きながら、でも唯一の救いとして、それがアメリカ政治に担保され、機能していると指摘しています。政治的多元主義を全体主義や独裁の対抗概念としてのみ捉える今日の知的常識では、その文脈で自由民主主義国家アメリカを確認できて一安心ということになるのでしょうか。しかし、今日の世界的な戦争か平和かの決定と実行を、このアメリカ多元主義体制の信頼性にすべてを委ねて、よしとするのでしょうか。そのような一国行動主義を許容できるのでしょうか。『朝日』といえば日本のリベラルな論調を代表しているとみなされているのですが、『朝日』にして然りとすれば、世界像の受容という点ではマス・メディアを含むわたくしたち自身が受動的大衆（パッシブ・マス）と化しているのではないかでしょうか。日々の報道の洪水のなかでバーチャル・リアリティの世界像を客観的な現実存在と信じていることになるのではないか。日本の今日では、「自民党をブッ壊す」と叫びながら内容のない「構造改革」という言葉を連発しつづける小泉政治、また「国際化」・「ボータレス・グローバリズム」を自然のものであるかのように振舞いつづける九〇年代以降のアメリカのグローバリズム、これらを経験するなかで、

政治外交・経済・軍事のプロパガンダ戦略が世界秩序形成のためにおしすすめられていると思わざるません。「市民社会のヘゲモニー」（グラムシ）になぞらえれば、そのプロパガンダはまさに世界社会のヘゲモニー形成と呼ぶに相応しいものといえるでしょう。

さて今日のテーマは、北朝鮮・イラク・アメリカをめぐるそれぞれの危機と戦争についての三題嘶れています。「ならず者国家」や「悪の枢軸」というレッテルをひとたびはずして、北朝鮮は、イラクは、そしてアメリカは、という問いを、各のおかれている客観的立場に即して眺めてみようと思います。

二、北朝鮮危機について

またもや今回、北朝鮮はN.P.T脱退を宣言しました。日本はもちろん世界中に衝撃が走り、「金正日」の異常な独裁国家はまさに「ならず者国家」だと反発し、「こわい国だ」、「金正日が核をもつたら内容のない「構造改革」という不安感がかき立てられ、報道されたりつ核攻撃されるか」という不安感が恐怖感へ、そしてその緊張状態の打開をもとめて、力による断固たる対応という選択の道が全国的に浸透し、広げられ

ているのではないかと懸念します。わたしは、情報を相対化するために一定の距離をとき、切り口を変えてみたいと思います。いま北朝鮮は自國をとり巻く環境をどのように認識しているのだろうか、その結果、いかなる政策的対応をしようとしているのだろうか、という文脈で考えてみます。

いま北朝鮮に深刻な実物教訓を与えていたのは、目下攻撃の渦中にさらされているイラクのおかれています。イラクのおかげで、連の平和的解決を目指す安保理決議にもかかわらず、他方ではアメリカの単独決断と単独行動はなんら拘束されていず、アメリカの対イラク全面攻撃を阻止する保障すらありません。「ならず者国家」というアメリカによるレッテル張りがつづく限り、遅かれ早かれ、フセインのイラク体制は力による壊滅を免れえない状態です。

この実物教訓の現実は、「いざれわれわれも第二のフセイン・イラクにされる」という恐怖感を北朝鮮に生みだしていると思います。「ならず者国家」とレッテル張りされていてる国々が、アメリカによつて順次各個撃破されていくと認識することは、それほど非現実的で不合理なものではありません。

逆に合理的な予測といえるでしょう。この予測につかぎり、中露独仏などによる国連主導の打開方式がアメリカの攻撃を回避させうると確信することはできず、さらにそれら諸国と日韓など近隣諸国との二国間関係の形成も同様の運命を背負わされていると考えるでしょう。

北朝鮮にとって、この多面的国際協調関係の道を選択することが十分な効能をもたらさないとすれば、たとえそれが危険な最後のカーデとみなされようとも、いわゆる「戦争瀬戸際戦略」の道を選ばざるをえないはずです。つまり、脅威の攻撃国アメリカとの直接交渉により不可侵保障の約束をとりつける道です。NPT脱退とIAEA査察拒否、そして核とミサイル開発におけるフリーハンドの確保という今日の北朝鮮の行動は、アメリカに直談判を迫っているものです。「ならず者国家」という色眼鏡だけで見れば、理解不能な非合理的な行動とみなすでしょうが、北朝鮮の立場からすれば、それなりの合理的な政策選択という面は否定できないでしょう。

非合理的ではないが、危険なこの道の選択を余儀なくさせたもう一つの直接的で決定的な要因は、

朝共同宣言路線の逆転的な破綻でしょう。共同宣言路線のもとで拉致問題が早いテンポで展開し、拉致被害者五名の一時帰国が実現しました。それを契機に日本では国民感情の激高を背景にした政治外交主導の後退的転換、つまり反動が起こったことは、周知のとおりです。さて振返ってみますと、小泉首相の「九・一七外交」は、日朝間の包括的国交正常化の道を探るうえで一定の可能性をもつ選択決断だったと考えられます。突発的であつたとはいえ、客観的にはアメリカの軍事的な強硬路線を修正しうる相対的な「自主」外交の芽をもつたものでした。したがつて、北朝鮮の立場からみれば、多角的国際協調関係の道に沿うものだつたでしよう。

月七日よりはじめた米朝秘密会談中の記録の部分的暴露だつたわけですが、ある意味では、アメリカがこの時点で強硬路線に日本を引き戻し、新しく合体再確認をさせたといえないともいわでしよう。一月以降、拉致プロパガンダと北朝鮮核脅威プロパガンダのもとに、北朝鮮危機がつくりだされているのです。「ならず者国家」論を正当化するこの環境は、北朝鮮の立場からすれば、米日結託した第二のイラクづくりとみえているはずです。たんなる想定ではなく確信的予測になれば最後のカードを切ることもありうるわけです。

しかし、危機が危機を呼ぶ現状としてのみ北朝鮮危機を考えるのは、政治外交のプロパガンダに身を委ねるにひとしいことです。目下扼殺されようとしている「九・一七外交」を日本が取りもどすことは可能です。この道を日本外交が選択することは、幻想とか理想ということではなく、前に触れたように危機を回避する客観的な現実可能性をもつものです。北朝鮮にとつても、現に「九・一七外交」における他方の当事者として行動したわけですから、選択許容の道なのです。

組合意のもとに多角的国際協調関係をつくりだす方向に歩み、二〇〇〇年六月や南北首脳会談を実現させました。その最大の特徴は「自立・自立の民族統一」であり、韓国の太陽政策への対応でした。その大枠としての延長上に今回の日朝首脳会談が生まれ、その中でも特筆すべき点は、拉致事実を認め謝罪したことです。国家が過去の謀略工作を公認することは、通常ではなされない例外的な政策選択です。この選択への踏み出しへは、たぶん北朝鮮の権力中枢内部で熾烈な闘争が行われ、曲折をへて実現したものと思わざるをえません。したがって、ともかく中露と日韓という北東アジア諸国との多角的協調方式が北朝鮮の生き残り戦略として、いまだ持続しているといえるでしょう。

龍谷大学名誉教授

龍谷大學名譽教授

燎原文芸 黒住嘉輝

動かぬ証拠

突きつけんと国連査察団は探すなり大量破壊兵器の「Smoking Gun」

エルバラダイ事務局長ブリクス委員長 日毎映れば知り人のごと

ブツシユには勝てねど報道官フライシャーよりは我が髪多しと思う

金正日・ブツシユ・フセイン・シャロン・アラファト各々が正義持てば危うし

大河ホータン

夏の三月昆侖の氷河解け出してタクラマカンをうるおす大河

夏ごとに砂漠うるおす大河ホータン タ克拉マカンを貫流しゆく

回転式うちわで羊肉炙り売る老爺底抜けに明るき笑顔

羊肉料理に欠かせぬ香辛料九十七種類ホータンバザール

残酷

胡散臭い二人の息子フセインの跡継ぎはどうやらウダイとクサイ

模倣犯必ずあれば地下鉄の放火を避けてしばらくは乗らず

老いてゆくことの残酷三十六歳 三浦知良^{カズアキ}がレギュラーを争うことも

丁玲の「我在霞村的時候」低き声にて講じし若き日の高橋和己

編集後記

いま北京では日中韓米露と北朝鮮の核兵器をめぐる協議が進行中である。経済援助・拉致問題がからみ、各国の関心は一樣でない。一ぺんで解決とはいかないだろう。だがこれがキッカケとなつて話し合いがくり返されるようになることを望まずにおれない。

五八年前の八月一五日も、冷夏の中のやはり暑い日だった。今年も日本列島は冷夏と言うが、残暑はきびしい。しかし敗戦は日本人を新生の希望に目ざめさせ、やがて日本国憲法の制定となつた。大日本帝国憲法と日本国憲法の二つの時代を生き、戦争と戦後を経験した私には、いかに論議されようとも戦後民主主義の方がよかつたことが明白である。ところが小泉首相が自民党総裁選挙を前にして憲法改正を口にしだした。彼の「改革」の落ち着く先はやはりそこだったのか。彼の国内での仏頂面、ブツシユ大統領と会った時の満面に笑みをたたえた愛敬面を思い浮かべてしまう。

総会での田北氏の小講演は、今の情勢にも示唆するところが多いので、当日のレジュメをそのまま収録させて頂いた。味読して頂きたい。

なお総会では会員の新かく得が、会の存続のための必須の課題である

と指摘された。皆さんの御協力を願つてやまない。

会および会報については、左記へご連絡下さい。
〔事務局〕

〒六〇六一八一〇七

京都市左京区高野東開町
一一一三三 第三住宅

三三一三〇二 井手 幸喜
TEL FAX ○七五七二二一三八二三
かすみむらにいたとき

